

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

木下 和真・教育認知心理学コース・博士後期課程3年

国際学会：SARMAC2025(記憶認知応用研究学会 2025)

参加地・期間：アイルランド・キルデア 2025年6月9日～6月17日

発表題目：Abacus number representation framework

成果の概要

2025年6月11日から14日にかけてアイルランド郊外の街キルデアにて開催されたSARMAC2025（記憶認知応用研究学会）に参加してきました。SARMACは記憶・認知に関する応用研究の世界トップレベルの研究者が集う国際学会であり、非常にフレンドリーな雰囲気でもあります。当たり前に飛び交う英語にもまれながらも、日を追うごとに、その環境に慣れていく感覚を楽しむことができました。

本学会で行ったポスター発表は、「Abacus number representation framework」というタイトルで、そろばんで表された数表象の効率性を、暗算課題を通して検証した研究でした。そろばんという計算器具に慣れ親しんでいない欧米の研究者に、自分自身の研究をどのように伝えるかが重要だと考え、いくつかの課題を自分自身に課すことにしました。一つ目は、自身の研究内容を英語で滑らか且つ高速で話すことです。海外の方々は、ポスター発表を聞くとき、興味深く感じたところに焦点を当てて聞こうとする傾向があると感じていました。冗長な英語では興味が削いでしまう可能性があります。そこでポイントを明確に、高速に話すことで初めて、研究内容について深く議論できると考えました。そのために行ったのは発表内容をすべて暗記し、どこからでも話せるにすることでした。一日のプログラムが終了すると、ホテルの部屋や会場の周りを散歩しながら練習を繰り返しました。二つ目は少しでも自分の存在を知ってもらうことでした。そのために行ったのは、学会が主催する交流イベントにできる限り参加することでした。初日のバーベキュー、朝の5kmジョギング、専門家との交流ランチと積極的に参加し、そこで、自分の研究内容を伝え、是非、ポスター発表に聞きに来てほしいと伝えました。三つ目に行ったのは実際のそろばんを持参することでした。研究者の方々の前で実際にそろばん珠を高速で動かすことで興味を引くことに努めました。最後に、ポスター発表で興味を持っていた研究者の方々に、後日、もう一度話しかけることでした。逆に、こちらが話しかけてもらえることもあり、より深い議論ができたと感じました。

自身のポスター発表以外の時間には様々な発表やシンポジウムに参加しました。私自身の専門から離れた内容になると専門用語が多く、高速で話される英語のため深く理解できないことも多々ありました。しかし、研究に取り組む姿勢はひしひしと伝わってき、より深く知りたい、勉強したいと感じることができました。これは国際学会に参加し、その熱気を肌で感じてたからこそ得られるもので、強い刺激を受けることができました。

私自身は社会人大学院生であり、年齢制限などから支援を受ける機会が限定されています。そのため、今回の支援は非常にありがたいものでした。物価が高騰する昨今、渡航費や滞在費を考えると国際学会参加に二の足を踏んでしまいがちです。実際、日本からの発表者は5人のみでした。これは金銭面の影響が大きかったのではと感じています。このような状況の中、私は本支援があったからこそ、この国際学会に参加することができたと感じています。

今回、様々な研究者との交流を通じて、自ら積極的に交流することの大切さに気が付きました。そのためには、自分自身の研究がしっかりしたものでなければなりません。英語力も大切です。今後もこの経験を活かし、世界に向けた研究を進めて行きたいと思っています。最後になりましたが、この度の支援に対し心から感謝を申し上げます。